

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520464

研究課題名(和文)バリ語とインドネシア語のコード混在コーパス構築と社会言語学的動態の記述

研究課題名(英文) Descriptions of Balinese-Indonesian code mixing and sociolinguistic dynamics in Balinese society

研究代表者

原 真由子 (Hara, Mayuko)

大阪大学・言語文化研究科(研究院)・准教授

研究者番号：20389563

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：バリ言語社会を構成する主要な話者タイプによる会話コーパス構築の一部として、主にバリ語山地方言話者の自然会話を収集・記述を進め、バリ語平地方言とインドネシア語の影響(借用、コード混在など)を知るための基盤を作ることができた。さらに、その過程で、山地方言の言語構造と社会構造の相互作用についても考察を行った。また、インドネシア語をより頻繁に用いるバリ語平地方言話者の会話に見られる二言語のコード混在の特徴を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Natural conversations by Mountain Balinese Dialect speakers were collected and transcribed as part of the corpus of Balinese conversation. Interferences from Indonesian and Lowland Balinese Dialect, the other major Balinese dialect, such as borrowing, codemixing found in their speech were observed. In the process, the relationship/interaction between linguistic structure and social structure in Mountain Balinese Dialect area was studied. This study also examined characteristics of Balinese-Indonesian codemixing phenomenon by Lowland Balinese Dialect speakers, who use Indonesian more frequently than Balinese.

研究分野：社会言語学

キーワード：コード混在

1. 研究開始当初の背景

バリ語には平地方言と山地方言の2つの方言が認められる。いずれのバリ語方言話者もさらに国語インドネシア語を話す二言語話者であり、バリ人の会話にはバリ語とインドネシア語のコード混在(BIコード混在)が頻繁に観察される。研究代表者は、バリ言語社会の多数派である平地方言話者によるバリ語がインドネシア語よりも優勢なBIコード混在を収集・記述し、機能やメカニズムについて分析した蓄積があった。

また、平地方言地域の都市部にはインドネシア語を第一言語として用いる若者が増えており、彼らの会話にはインドネシア語優勢のBIコード混在が見られていた。一方、山地方言話者の会話には、標準方言である平地方言やインドネシア語の干渉が見え始めていたことが面談調査などからわかった。

したがって、バリ言語社会の多数派である平地方言話者によるインドネシア語優勢のBIコード混在の調査研究を基盤として、それと対照する形で、平地方言話者の若者および山地方言話者に見られる社会言語学的な変化を記述する貴重な機会であった。

2. 研究の目的

バリ言語社会の「多数派」であるバリ語平地方言話者によるバリ語とインドネシア語のBIコード混在についてすでに研究代表者が行った記述・分析を根幹として、「少数派」、つまり近年増加しているインドネシア語をより多用する若年層のバリ語平地方言話者とインドネシア語と平地方言の干渉を受けつつあるマイナー方言のバリ語山地方言話者にも調査対象を広げる。

具体的には、コード混在の構造的特徴をふまえた言語学的妥当性のある枠組みで記述した、バリを包括するバリ語会話コーパスを構築した上で、バリ言語社会全体の社会言語学的動態を明らかにし、またバリ人の会話に非常に特徴的な二言語のコード混在の機能とメカニズムの問題を議論する。さらに、その過程で観察できた、その他の社会言語学的に重要な現象についても考察し、バリ言語社会の理解に貢献する。

3. 研究の方法

バリ語山地方言については、すでに調査を実施したことのあるバリ州ブレレン県プダワ村を調査地とし、平均年1回実施した。2010年に同村で実施した社会言語学的面談調査の結果を参考にし、BIコード混在や平地方言の混在が起こりやすい会話を録音によって収集し、山地方言話者とともに書き起こしを行った。また、インドネシア語をより多用するバリ語平地方言話者が行う会話は、それまですでに収集してあったデータに基づき、記述を行った。

これらの会話の記述に基づき、すでに分析が進んでいるバリ言語社会の多数派である

バリ語平地方言話者によるバリ語優勢のBIコード混在と対比しながら、それぞれの話者タイプが行う会話に現れるBIコード混在を考察し、その分布の傾向や機能を考察した。

4. 研究成果

(1) 研究期間全体を通じて、バリ言語社会を構成する話者タイプのうち、特に社会言語学的な研究が遅れていたバリ語山地方言話者による会話の収集・記述を進め、平地方言とインドネシア語の影響(借用、コード混在)を知るための基盤を作ることができた。さらに、この山地方言話者の会話データは、バリ言語社会の多数派を占めるインドネシア語を第二言語とする平地方言話者、近年増加しているインドネシア語をより多用する若年層の平地方言話者との比較を行うために重要である。

(2) 2010年に実施していたプダワ村における社会言語学的面談調査の結果分析をふまえ、会話の収集を行いながら、実際にはどのような状況なのかを観察した。面談調査では、使用言語変種、それらの使用頻度と使用領域、リテラシー、そしてそれらに対する態度・意識に関する質問を行った。その結果、プダワの人々は、山地方言を、私的な領域はもちろん、公的な領域でも日常的に最も頻繁に使用しながら、属性による程度の違いはあるが、必要に応じて、多数派方言である平地方言と国語インドネシア語も用いているということが窺われ、3つの言語変種の能力が必要とされる少数派方言話者の実態の一端を知ることができた。

また、彼らは次世代の子供も山地方言を一番に習得すべきである、つまり母語として習得してほしいと考えており、山地方言に肯定的な態度を示していると言える。それと同時に、多数派である平地方言(特に山地方言にはない敬語を含む)とインドネシア語の必要性も十分認識しており、それらを話す能力はもちろん、読み書きの能力ももつべきであると考えていることがわかった。その内容は、面談調査の結果分析を中心に、主に雑誌論文、学会発表で発表した。

(3) 山地方言地域での調査を開始して以来、会話収集と並行して、山地方言語彙を記録してきた。山地方言の特徴の一つは、平地方言と異なり、敬語語彙がないことであるが、語彙調査の過程で、宗教儀礼に関連する語彙には平地方言の敬語語彙(丁寧語、尊敬語、謙讓語)と一致あるいは類似するものが多数見られることがわかった。

宗教儀礼における神々、悪霊、祖先霊それぞれに対する祈禱を書き起こし、そのテキストを分析した結果、祈禱の対象によって敬語語彙が現れる頻度は異なることがわかった。神々と悪霊には敬語語彙が多く使われ、一方、祖先霊には敬語語彙はあまり使われていな

かった。

また、山地方言と平地方言の間には音韻構造の差異もあるが、神々、悪霊への祈祷においては、平地方言の特徴(語末に中母音 schwa が現れる)が見られ、一方祖先霊に対する祈祷では山地方言の特徴(語末に[a]が現れる)が見られた。

さらに、内容語/機能語の分布の違いも観察された。神々、悪霊への祈祷では機能語には敬語語彙が多く用いられ、祖先霊への祈祷では機能語には主に山地方言語彙(平地方言の普通語彙・汎用語彙と一致するものが多い)が用いられていた。

このように、神々、悪霊への祈祷では、平地方言の特徴が目立ち、祖先霊への祈祷では山地方言の特徴がより示されていると言える。この成果は、インドネシア言語学会国際大会で発表し(学会発表)、同学会誌に掲載予定である。

この研究は、バリ語の方言間の言語構造の違いだけでなく、文化・社会・慣習などの言語外の側面も考察が必要であることを示しており、今後も言語外の要素も考慮しながら、様々な領域における言語使用を調査していくべきである。

(4)バリ語平地方言には敬語体系が見られ、カーストを中心とする身分関係に基づいた敬語使用が行われる。話者間の関係に応じて、敬語レベルが異なる同義語の中から適切な単語を選ぶという語彙の交替によるものである。それに対して、バリ語山地方言地域にはカーストが見られず、出自による身分の違いはないため、平地方言に見られるような敬語語彙の交替による体系的な敬語はない。

しかし、山地方言が話されている社会はカーストの差が見られないとはいえ、全くの平等社会ではなく、世代や親族内の序列などに基づき目上と目下を区別している。その際、平地方言のような体系的な敬語ではないが、人称詞や呼称によってその区別が示される。その限定的な「敬語」使用を記述し、それに関わる背景・要因を明らかにしようとした。

その敬語使用は、親族内と親族外で異なるが、親族外の敬語使用は親族内でのものを応用している部分もあることがわかった。親族内では、世代の上下、未婚・既婚、子供の有無、血縁親族・姻族の4要素をもとに、個人名のタブーが生まれる関係かどうか(つまり目上か目下か)を判断し、人称詞・呼称が決まる。そして、人称詞・呼称には親族名称の転用が多く見られる。

一方、親族外では個人名を口にするタブーはなく、その意味での「目上」と「目下」の区別は存在しないため、人称詞・呼称の使い分けは原則として必要ないが、親族内の人称詞・呼称の区別をもとに、世代の上下、未婚・既婚、子供の有無の3要素が考慮されるやり方も認められる。つまり、上の世代の既婚者(特に子持ち)を目上とみなし、人称詞・呼

称を使い分ける。なお、親族内と親族外ともに、一般的に敬語使用に關与する要素として現れやすい、話者間の親疎、発話状況(フォーマルかインフォーマルかなど)などは、影響していないようである。

以上の内容は、主に雑誌論文、学会発表で発表している。

(5)バリ言語社会の多数派を占める、インドネシア語を第二言語とするバリ語平地方言話者が行う会話に現れるバリ語とインドネシア語のコード混在(BIコード混在)については、統語構造、談話構造、語彙構造(敬語語彙の交替による敬語法)の観点から分析し、研究が比較的進んでいた。

しかしながら、バリ言語社会を構成する1つのタイプである、近年都市部の若者に増加しつつあるインドネシア語をより多用するバリ語平地方言話者に関しては、まだ研究がなされていなかった。そのため、本研究では、インドネシア語をより多用するバリ語平地方言話者による会話を対象に、そこに現れるBIコード混在の頻度と分布を考察した。

具体的には、インドネシア語が形態素数においてバリ語にくらべて優勢な会話1事例を対象に、統語構造においてバリ語がどこに現れるか、どのような品詞(語類)に現れるか、またそれが敬語的にどのような語彙群に属するのかを考察した。

結論として、主に文末に現れる小辞・助詞、指示副詞、指示代名詞(*kenten, nika, nggih* など)、人称代名詞(*tiang/titiang* など)に起こるコード混在が「バリ語らしさ」を、とりわけ「丁寧なバリ語らしさ」を保持する枠組みを担っているという解釈を提案した。

分析対象の会話事例は、会話参加者が互いに敬語類に属する敬語語彙を用いることが期待されたため、「丁寧なバリ語らしさ」が示されたが、互いに普通語類に属する語彙を用いることが想定される会話であれば、普通語類が選択されることが予測される。

したがって、そのケースも含めた解釈を提示するならば、次のように表現できる。すなわち、敬語法をもたないインドネシア語優勢の会話において、句あるいは文全体にかかる機能をもつバリ語要素の一部が、「バリ語らしさ」を表すための枠組みを担い、そしてそのバリ語要素の敬語語彙(敬語類か普通語類)によって、会話の敬語レベルを果たしている。

以上の内容は、主に雑誌論文、学会発表で発表している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

原真由子、「バリ語とインドネシア語コード混在会話におけるバリ語 *nggih*,

kenten, nika の機能」、『インドネシア言語と文化』、査読なし、22 号、2016、pp.21-33

原真由子、「バリ語山地方言における人称詞と呼称に見られる敬語使用」、『インドネシア言語と文化』、査読なし、21 号、2015、pp.1-11

原真由子、「バリ語山地方言使用地域における社会言語学的様相-プダワ村の面談調査から」、『インドネシア言語と文化』、査読なし、19 号、2013、pp.33-58

〔学会発表〕(計 4 件)

原真由子、「バリ語-インドネシア語コード混在会話におけるバリ語の particle が果たす機能」、日本インドネシア学会第 46 回研究大会、2015 年 11 月 14 日、京都外国語専門学校

原真由子、「バリ語山地方言における人称詞と呼称に見られる敬語表現」、日本インドネシア学会第 45 回研究大会、2014 年 11 月 15 日、神田外語大学

Hara Mayuko, “Bentuk hormat ” dialek bahasa Bali Aga dalam konteks agama, インドネシア言語学会国際大会、2014 年 2 月 19 日~22 日、バンドルランブンシェラトンホテル(インドネシア共和国)

原真由子、「バリ語山地方言使用地域における社会言語学的様相-プダワ村の面談調査から」、日本インドネシア学会第 43 回研究大会、2012 年 11 月 18 日、慶應義塾大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

原 真由子 (HARA, Mayuko)

大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授
研究者番号：20389563